高校演劇叢書●第二十九巻

熊谷邦夫脚本集

門土社総合出版

高校演劇叢書●第二十九巻

熊谷邦夫脚本集

門土社総合出版

熊谷邦夫

昭和18年8月，秋田市千秋公園城下町に生まれる。
秋田高，東京農業大学農学部卒。秋田和洋女子高校教諭。
高校演劇同人。全国高等学校演劇協議会理事。秋田県現代舞踊協会事務局長。秋田市竿灯妙技会審査員。秋田演劇舞踊学院主宰。
昭和57年，日独青少年指導者セミナー演劇部門のチーフとして約一か月西ドイツに派遣される。
演劇作品の他，舞踊作品として「八郎潟」「なまはげ」「青い炎の女」「傷を洗う二の女」「熾天使」「雪の華」「死に顔の朝」「太陽が涙」「傷痕」「れくいえむ…青い地球の鎮魂詩」などがある。
昭和37年～45年までプロの男性舞踊手として主に東京で活躍。
現住所　〒010 秋田県秋田市牛島東3-1-39

《高校演劇叢書》第二十九巻
熊谷邦夫脚本集

著者　熊谷邦夫
企画　岡本豊子
編集　田邉道子
制作　同林工房
校正　和田守
印刷　藤原印刷
発行者　小澤紀子
発行所　門土社総合出版株式会社
〒244 横浜市戸塚区下倉田町一四七八番地
☎〇四五(八六四)〇二四四番
平成四年九月五日　初版第一刷　発行
《定価　一三六〇円(本体一三二一円)》

©1992 Kumagai Kunio
ISBN 4-89561-133-7 C 0374

目次

切片　3
花片　47
私にかわって　83
硝子細工の薔薇　111
白い炎　137
明日へ……　175
生命の叫び　209
——安梅宏美作「かざぐるま」より
舞台図　238
あとがき　245

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

切片

《登場人物》

あけみ（十七歳）
妙子（十七歳）
校長（声）
教頭
三浦（教師）
鈴木（教師）
岩谷（教師）
森山（教師）
松本（教師）
大柴（教師）
山川（教師　あけみの担任）
加賀（教師　退職間近）
小林（教師　生徒指導主任）

幕、急速に上がる。舞台はシルエット、人物はストップモーション、ややして、強烈なジャズロック調の音楽入る。あけみを含む女生徒たち、流行の踊りを激しく踊り始める。音楽止まり、ブルース調の静かな音楽が流れる。妙子、あけみのそばに行く。

妙子　あなたはなぜここに来るの？　どうして踊るの？

あけみ　わからないわ。ただじっとしてられないの、何かしていないと、そうしないと心の中に穴があいたみたいなの。

妙子　わからないわ、こんなうるさい音楽、身体がちぎれそうな踊り。

あけみ　ええ、私もそう思うわ、だけど何か、言葉で言い表せない何かが心の中で叫んでいるの、これが本当の私なのかって、私が本当に何をしたいのかって。

妙子　あなた、また何かやったの？

あけみ　何もしていないわ。（叫ぶ）あなたにはわからないのよ、私の気持ち。

舞台は急転する。この間、影の声が入る。

影の声　（校長）この件につきましては、いちおう意見が出尽くしたようですので、十人の先生に会議をもっていただいて、なおいっそう、問題点を掘り下げてもらいたいと思います。生徒指導部からの報告を踏まえ、より良き解決を望みます。これは生徒の一生の問題でありますので、少し

でも問題点がありましたら、さらにご検討くださるようお願いいたします。これにて、職員会議を終わります。長い間、御苦労様でした。

中央にテーブル。半円形に椅子、壁面は厚めにそのままで立つように作り、キャスターをつけ、分割する。裏面は前場面のディスコの場面から十人で簡単に転換できるようにする。壁面の片側は窓、片側には廊下に通じるドアがある。テーブルの上には、氷の入ったポット、正面の壁に時計、その下近くに電話台、その上に電話。先生たちが入ってくる。何となく気まずく、落ち着かない雰囲気。窓から外を見ている山川先生。

大柴　私は今朝、お天気ダイヤルしましたわ。今日は今年で一番の暑さになるんですって。こんな日のために、冷房ぐらい入る部屋が欲しいですね。（何となく山川へ）

山川　そう……（何となくうなずき、何かを一生懸命考えている様子）あっ、でも、夕立があるらしいわよ。テレビで今朝ちらっと見ましたよ。

岩谷　（ノートにメモをしている三浦先生に）何をしているの、三浦先生？

三浦　話がもつれることになると思うからよ。だから職員会議のメモを分析しているの。

岩谷　本当にそうなりますか、ほほう、そうなったら今度あなたを教頭にでも推薦しますか。きっと適任かもしれないわね。

鈴木　会議をどう思いまして？

三浦　どう思うって……とても興味がありましたわ。
松本　おほほ、私眠っちゃうところでしたわ。
大柴　早くやりましょうよ。みんなまだ仕事があるんですから。
教頭　もう五分待ちましょう。一人まだですから。
森山　教頭先生、どんなふうに座りますか？
教頭　適当でいいでしょうね。

めいめい適当に座り始める。

森山　あら、そこは私のいつもの席ですわ。
鈴木　失礼しました。（立つ、そして山川先生のそばに行く）
森山　いえ、いいんです。私こちらに座りますから。

二、三のグループに分かれ、世間話をしている。できるだけおもしろい話がいい、生徒の話とか、先生たちの噂話とか。

教頭　皆さん、話をやめてください。
大柴　早く済ませましょう。

教頭　（窓のほうへ）始めたいと思いますが。

山川　（我にかえって）あ、失礼しました。

席に着く山川先生。

小林　あの生徒は盗みをしたんですのよ。しかも、大金をね。退学ですよ、退学。

三浦　わかりきったことですわよね。

教頭　みんな揃いましたか？

松本　おばあちゃん先生がまだです。

教頭　あ、加賀先生、まだですか、ちょっと呼んできてください。

その時、加賀先生がドアを開けて入ってくる。

加賀　失礼しましたね。お待たせするつもりはなかったのですけど、年を取りますと……すっかり忘れてました。本当に申しわけございません。さあ、始めましょ。

教頭　では先生たち、どう進行したら良いでしょうか。

大柴　えっ、教頭先生何も考えてなかったんですか？　早く済みそうもないわねえ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

皆同調し、がやがやする。

岩谷　先生たちがこの件をどう思っていらっしゃるかそれを伺ったほうが良いのではないでしょうか。

大柴　そうですね、一人一人の気持ちを聞きましょう。もしかするとすぐ終わるかもしれませんよ。

教頭　そうですね、それでは……ええと……ご存じですね、この生徒はふだんから行ないがよくありませんが、この生徒にとっては、一生の問題です。ですから十人のこのメンバーで充分に意見を出し合って、特に退学処分については全員の先生が納得いくまで、話し合わなければなりません。これが本校の教育方針ですので、先生方には充分ご理解いただいておると思いますので、よろしくお願いします。私としても、一教師として皆さんと充分に話し合っていくつもりです。

三浦　良くわかっています。

小林　それでもみんなの意見を聞きましょうか。

教頭　そうしましょう。退学処分にしたほうが良いと思っている先生、何人くらいおりますか？

山川　（立って）教頭先生、待ってください。まだ何も話していません。今、充分に話し合いをするとおっしゃったばかりではないですか。

教頭　いや、先生方の気持ちだけいちおう知っておいたほうが良いかと思ったものですから。ええと、退学処分に賛成の先生、手を挙げてください。

鈴木、岩谷、大柴先生をはじめ四、五人の手が挙がる。そして、加賀先生は最後に手を挙げる。

教頭　一人、二人、三人、四人、五人、六人、七人、八人、私を入れて九人の退学処分ですね。処分する必要がないと思う先生は？

山川が手を挙げる。

教頭　退学が九人、退学反対が一人です。これでだいたい、私たちの立場はわかりました。

大柴　どうしたことでしょう、いつでも一人くらい反対するおかしな先生がいるものですわ。早く終わりたかったのに。

三浦　じゃあ、これからどうしましょう。

山川　先ほども言ったように、意見を出し合ったらどうでしょうか。

三浦　驚いたわ、先生！　指導部の先生があれまで主張したのに、あの生徒が本当に不良でないとお思いですの？　それに職員会議で意見は出し尽くしたはずよ。担任としての立場はわかりますけど。

山川　わかりません。

三浦　何がわかりませんよ。根っからの不良だとわかるでしょう？

山川　まだ十七歳ですよ。話し合いたいのです。このままだと、私は納得できません。

大柴　何を話し合いたいのよ。九人までもが退学処分に賛成なんですよ。

小林　お聞きします。山川先生は本当にあの生徒を信じているんですか？

山川　わかりません、たぶん信じないでしょう。

大柴　じゃあ、なぜ反対したんですか？

山川　みんなが退学処分に賛成しているとき私も賛成したら、何も話し合うことができなくなりますでしょ。あの生徒を担任だからだけでなく、簡単に退学処分にすることはできないと思いますから……。

大柴　あら、誰が簡単だと言って？

山川　誰も……、そんな。

大柴　私が一番早く退学処分に手を挙げたから？　私は百パーセントあの生徒は処置なしと見ましたわ。

山川　大柴先生の気を変えさせようとしているわけじゃありません。今先生たちが論じていることは、人一人の一生の問題に関わることだからです。五分間で決められることではないと思います。もし、私たちのほうが間違っていたら、どうしたらいいでしょう。

大柴　長く話そうと、直ぐだろうと、同じだと思いますわ。五分だっていいと思います。

山川　一時間話し合いましょう。

教頭　どなたか意見のある先生は？

加賀　一時間くらい、構いませんよ。

小林　（イライラして）そうでしょうか。何のためか聞かせてください。

山川　良くわかりません。理由はわかりません。いいですか、確かにあの生徒は乱暴でひねくれていると思います。なぜそうなのか、十七年の生活がどうなのか、私たちは彼女のために少し話し合う義務があると、そう思ったからです。それに一年の最初のころはとても良い生徒でした。

小林　私はそうは思いません、私たちは、あの生徒に何もしてやることはないと思います。わからないんですか、生徒指導主任として、あの生徒を調べたんですよ。正体を知っていながら、あの生徒を信じろなんて言われたって無理な話ですわ。いいですか、私は長い間、ああいう生徒たちを取り扱かってきて、一つだって信じてやれることはなかったんですよ。あの生徒も同じだと思います。

加賀　そんなバカな話はないでしょう。（立つ）

小林　まあ、聞いてください。

加賀　小林先生は生まれついての神様みたいに真実そのものなんですか、本当に自分本位なんですわね。

教頭　先生方、本題からそれないでください。

岩谷、鈴木に絵を見せる。

鈴木　面白いですね。

岩谷　そうでしょう。

教頭　岩谷先生、すみませんが。

岩谷　どうもすみません。いたずら書きをしていると考えがまとまりやすいものですから。

教頭　私たちは結論を出さなくてはなりません。永久にここにいるわけには参りませんので、どんどん意見を出してください。

三浦　私の考えはこうですわ。あの生徒のブローチが生徒の立ち入ることのできない事務室の犯行現場に落ちていたこと、もうこれだけであの生徒の犯行と決まっています。

大柴　賛成です。

教頭　それだけですか。

鈴木　そう。

教頭　他にありませんか。

山川　生徒は今でもお金を盗ったことを否認しています。生徒を信じたいと思います。

小林　あの生徒が事務室に入るのを掃除のおばさん、そう、鎌田用務員が見ています。

山川　窓越しにですね。

小林　もうこれで充分です。

山川　お聞きしたいことがあります。

小林　何でも聞いてください。

山川　あなたはあの生徒を信じない、ではどうしておばさんの話を信じるんでしょうか。

小林　山川先生、あなたは！（立ち上がる、そして近づく）

教頭　まあ、まあ、先生方。

大柴　座ってよ、座りなさい。

教頭　落ち着いてください。

山川　教頭先生、もう一度先生方の意見を聞いてください。

教頭　先生方、いかがでしょうか。

山川　もう一度、退学に賛成なのか、九人の先生方に聞いてみてください。もし、先生方、みんなが退学処分なら私はもう一人で頑張ることはしません。直ちに学校長へ処分決定を提出しましょう。しかし、もし誰かが私と同じ考えを持っていたらここに残って討論しましょう。それだけです。

大柴　いいわ、面倒だけどやってみましょう。

教頭　賛成でしょうか、（全員うなずく）反対の先生は？　いませんね。ではこの紙に先生方の気持ちを書いてください。退学がどうか。

小林　いちいち紙に書かなくても、さっきのように手を挙げればいいんじゃなくって？

教頭　手を挙げづらい先生もいると思いますので、やはり無記名のほうがはっきり、自分の気持ちが出ると思いますので……よろしいですか。（全員うなずく）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com